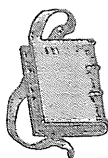


# コミュニティにおける公共図書館の位置づけ

吉田 右子 (よしだ ゆうこ)

アメリカでは、コミュニティの活性化に図書館が不可欠であり、それが民主主義を保障するという認識が広く共有されている。そうした期待を受けて、司書たちがいかに専門的スキル——ライブラリアンシップ——を発揮してきたのか、その実践に学ぶ。



## 一 はじめに

日本の公共図書館は今、資料提供の場から様々な文化活動を行う機関へと大きく転換をはかろうとしている。また図書館が本来持っている専門的な機能である、調査研究のための情報サービスを積極的にアピールしはじめている。しかしながら現時点では図書館側の意識と、利用者の公共図書館に対する意識の間には大きな溝があると言わざるをえない。大半の利用者の図書館に対するイメージは、気軽な読み物を借りる場所、そして受験勉強や持込資料による個人学習スペース

という所にとどまっている。図書館の多様な機能を利用することによって達成できる可能性と、貧弱な図書館像とのギャップは、図書館にとっても利用者にとってもかなり深刻な問題である。

本稿では、公共図書館に対する退屈なイメージを打ち破るための手がかりとして、現在、行われている多様な図書館サービスを最初に確立した、アメリカの公共図書館の歴史をみていきたいと思います。百年以上にわたる歩みのなかで、アメリカの公共図書館が地域住民にどのような影響を与えてきたのかを振り返ることで、コミュニティにおける公共図書館の位

置づけを確認することができらるだろう。

## 二 アメリカにおける公共図書館の成立

アメリカにはどのコミュニティにも公共図書館があり、住民はごく自然に図書館サービスを享受しているが、誰もが自由に訪れることができる無料の図書館が設立されたのは、十九世紀末から二〇世紀初頭である。慈善家アンドリュー・カーネギーは、各コミュニティに公共図書館を設立するため、莫大な私財を投資した。このときアメリカ全土に設立された図書館によって、現在の図書館サービスの基盤が築かれた。

ところで図書館は建物とそこに収められた資料だけでは成立しない。そこには必ず専門的スキルを持った司書によるサービスが必要である。アメリカの司書教育は、図書館十進分類法の考案者として知られるメルヴィル・デュイーが、一八八七年にコロンビア大学内にスクール・オブ・ライブラリー・エコノミーと呼ばれる図書館学校を設立し、正式にスタートした。デュイーはそれまで図書館内部で行われてきた徒弟制度のような司書養成プログラムを独立した教育機関に移行し、専門領域として体系化した。そして「最善の圖書を最

低のコストで最大多数の人に」という明確でわかりやすい目標を掲げ、図書館実務の向上を目指したのであった。

二〇世紀に入ると、全米の図書館建設を推進したカーネギー財団が、司書教育の見直しに着手した。財団はデュイーが進めた実務重視型の教育方法を再検討した。一九二三年に出された報告書『ライブラリー・サービスの教育』では、図書館職の質的向上にとって、図書館員養成のための学術的な領域の展開が必要であることが強調された。この報告書がきっかけとなりライブラリースクールは大学の内部に設置され、図書館学と呼ばれる一つの学問領域として発展していくこととなった。

## 三 教育機関からメディアセンターへ

### ——二〇世紀初頭の公共図書館サービス

初期の公共図書館は、読書を通じて利用者の自己改善を促すことを主眼としており、教育的色彩の濃い施設であった。しかしこうした伝統的な公共図書館の理念は、大衆文化の浸透とともに、徐々に変わっていくことになる。二〇世紀初頭は、電話、映画、ラジオなど様々なメディアがアメリカに普

及した時期であり、人々の生活はマスメディアから発信される大量の情報に満たされつつあった。情報源の増加にともない住民のニーズが多様化・複雑化する中で、公共図書館が純粋に教育理念のみを掲げて存在していくことは困難になっていった。

情報への公正なアクセスを保证する機関として、図書館は様々なメディアによって生成される多様な情報を利用者に提供する必要がある。図書館は現実との乖離を避けるためにその方向性を少しずつ変えていった。そして図書だけでなく映画やラジオなどのメディアを積極的に図書館サービスに取り込むことで、コミュニティのメディアセンターとしての役割を果たすようになった。アメリカ公共図書館は二〇世紀初頭の時点で、教育を主目的にする啓蒙機関としての伝統的なあり方から脱却し、コミュニティのあらゆる知的要求を満たすために、より広い文脈で情報サービスを提供する場合となったのである。

資料提供を基本サービスとして、図書館では様々なサービスを展開していった。子どもたちに良質な読み物を提供するための児童サービス、職業的な課題に関する調査・研究を支

援するビジネス情報サービス、個人の読書活動に関して専門職の立場からアドバイスする読書カウンセリングなど、今日行われている図書館サービスのバリエーションが二〇世紀初頭に出揃っている。現在、アメリカの公共図書館で見られる様々なプログラム——講演、映画上映会、コンサート、読書会、語学講座、グループ学習——は、どれもこの時期に行われていたサービスである。

#### 四 公共図書館

——行きたいと思った時そこにあってほしいもの

伝統的なサービスと新しいメディア・サービスを重層的に組み合わせることで、図書館はアメリカのコミュニティにその存在をアピールし、住民もまた自分たちのコミュニティにとって欠かすことのできない大切な場所として図書館を意識するようになっていった。

一九五〇年代にアメリカで全国的な公共図書館調査が実施された。雑誌、新聞、ラジオ、テレビといった様々なメディアに囲まれた住民にとって、公共図書館はいつたいどのような存在として受けとめられているのかを調べるためである。

ある程度予測していたとはいえ、調査結果は図書館界にショックを与えた。というのも図書館利用者がメディアに対して意識が高いごく限られた人であること、主な利用者が若年層であること、図書館が貸出以外の情報サービスを行うことを知っている住民は半数以下であるといった結果が示されたからである。

しかし奇妙なことに、図書館の機能やサービス内容への認知度が低いにもかかわらず、住民はコミュニティにおける図書館の存在を支持していた。圧倒的に多くの住民が「図書館の不在はコミュニティに影響を与える」と考え、公共図書館をコミュニティの持つべき象徴的存在として肯定的にとらえていた。一見矛盾するこの結果こそが、コミュニティにおける図書館のあり方を端的に示している。公共図書館は実際の利用にかかわらず「いつでもそこにあつて」「必要が生じたときに」訪れることのできる場所としてコミュニティに求められたのである。

## 五 メディアとしての図書館

多くのメディアに囲まれて日常生活を送っているわたした

ちは、必要に応じてメディアを選択している。おそらくアメリカ社会では、半世紀以上も前からこうしたメディアの選択肢の中に、公共図書館が組み込まれていたのだろう。他のメディアとは少し性質が異なるけれど、頼りになるコミュニティ・メディアとして。だが、「ただそこに存在し」「必要とされたときに手を差し伸べる」という図書館サービスの基本的なあり方は、たとえばマスコミュニケーションと比較したとき、ずいぶん効率が悪くもみえる。

もちろん図書館界は、ただじつと何もせず利用者を待っていたわけではない。ライブラリーフレンズと呼ばれる図書館の支援組織の助けを得ながら、積極的に図書館をアピールし来館を促した。図書館に來ない住民を「潜在的利用者」と呼び、図書館に來てもらうためにあらゆる手段を講じてきた。地理的に遠くて図書館にアクセスできない人々に対しては、バスを走らせて移動図書館サービスをすることで、コミュニティ全域にサービスが行き届くようにした。身体的・精神的な理由により来館したくともできない人々のもとに図書館が出向く「アウトリーチ」にいたっては、百年近くも前からサービスをはじめている。しかしこうした試みをすべて合わせ

たとしても、図書館が効率の悪いメディアであることに変わりはない。では図書館のメディアとしての存在意義は、いったいどこにあるのだろうか。

## 六 コミュニティにおける公共図書館の位置づけ

メディアの長い歴史の中で、時代の変遷に伴っていくつかのメディアは姿を消した。生き残ったメディアは社会の中に重層的に存在し、メディア全体の布置の中で特定の位置に自らの場所を定めている。ここで公共図書館は、情報と学習に関するコミュニティ・メディアとして位置づけられるだろう。情報や学習にかかわる機関は他にもたくさんある。しかしながらあらゆるメディアに含まれる情報の収集・保存を行い、体系的に組織化された資料が専門職によって提供される点で、公共図書館はユニークな組織でありコミュニティの中で固有の役割を持っているからである。

また図書館が扱う情報にも特徴がある。図書館は社会で生産される情報全般を対象に収集、組織化、提供を行うのであるが、商業主義的な性格を強く帯びる情報と公共図書館の扱う情報には相違がある。たとえばコミュニティの情報流通に

関して、文化的価値が定まらない実験的な創作物、利用頻度は低くとも後世に残すべき情報、読み手の数は限られるもの、特定分野の表現形態としてコミュニティで共有すべき情報など、市場とは別の原理によって成立する文化的領域を維持するために、公共図書館が重要な役割を担っている。

さらに住民のメディアを通じて学びを支援するという機能も、他の機関では代替することができない。近代公共図書館は教育的機関として出発し、その発展とともに多様なメディアを視野に入れ、成長の過程でサービスを拡張していった。だがメディアを通じて住民の自己学習を支援するという目標を手放したことは一度もなかったのである。

## 七 アメリカ公共図書館の存在理念を探る

なぜアメリカの公共図書館は、資料提供サービスにとどまらず多目的で複数の機能を持つ機関として、コミュニティに存在していくことを選んだのだろうか。その理由を探るためには、図書館存立の理念をもう少し掘り下げる必要がある。

実はアメリカ社会にとって図書館の最も重要な役割は、民主主義を支えることにある。民主主義は、主体的に情報を求

め自ら収集した情報を適正な判断によって利用する能力を有する市民の存在を前提としている。情報と主体的に向き合うことのできる市民を育成していくという図書館サービスの目標は、民主主義を標榜するアメリカ社会の存立理念自体と結びついているのである。

このような役割を果たすためには、公共図書館が個人にとつてのインフォーマルな学習の場として機能する必要がある。図書館は自力で自らの問題を解決しようとする利用者を支援することになる。図書館での学びは基本的には自己学習であつて、利用者は情報利用や学習に関する目標を自分で設定している。人によつて目的は様々であり、求める情報に達するプロセスも異なる。ある課題に対して、なるべく短期間で解決したいと考える利用者もいれば、時間をかけてゆつくり取り組みたいと思う利用者もいる。また司書に対して情報要求をはつきりと表現できる利用者と、情報要求の形にさえならない思いを司書に伝えようと試みる利用者もいる。

利用者の主体的な学びを支えるという理念を利用者支援として実践することで、アメリカの図書館は多様な利用者の存在を認め、そのニーズを受け止めてきた。アメリカの図書館

がその役割を狭く規定せずに多目的機関としての道を歩んだのは、利用者の多様なニーズにこたえるためであつたといえるだろう。

## 八 ライブラリアンシップという専門スキル

しかし図書館が実際に多目的機関として存在することで、活動の方向性が外部から見えにくくなったことは否めなかつた。図書館界では運営目的のあいまいさを批判されるたびに、図書館の意義や目標を問い直した。議論のたびに確認された原則——それは図書館活動の中核が、専門職である司書がメディアを媒介して利用者の情報要求を満たすための支援を行うことにあるという点である。

アメリカには、図書館のこうした本質的な役割を一言で表現する「ライブラリアンシップ」という便利な言葉がある。ライブラリアンシップは図書館業務の技術的側面から、技術を支える理論・思想を含めた広い概念であり、学術的体系を備えた専門職スキルとして百年以上も前に専門教育が始まつている。アメリカでは現在、大学院レベルでライブラリアンシップが教えられている。

結局、公共図書館の存在意義は、司書によるライブラリアンシップという専門的なスキルの実践にあるといえるだろう。メディアやコミュニケーション様式が変化しようとも、情報の公正なアクセスを確保し、利用者の情報要求を支援するという理念、そして情報の収集・組織化・提供にかかわる実践を中核とするライブラリアンシップの原則が変わることはない。

極端に言えば、司書の専門スキルと資料があれば、ライブラリアンシップが成立するので、ライブラリアンシップは必ずしも図書館という場所を必要としない。たとえば二〇世紀初めのアメリカでは、司書は馬や船で図書館の未設置地域の利用者のもとに出向いて図書館サービスを行った。専門教育を受けた司書が届けたのは、図書だけではなく利用者の情報要求に応える専門的助言であった。

## 九 場所としての図書館

デジタル化されたコレクションにアクセスできるコンピュータを持った司書が、図書館という場に制約されず、利用者にサービスを行うことは原理的に可能である。現に図書館は

コレクションとサービスの電子化を進め、来館しなくても済む図書館サービスの提供を積極的に推進している。では、本来に場所としての図書館はなくなってしまってもよいのだろうか。

この種の議論を半世紀以上続けてきた司書は、図書館の物理的存在の有無を二者択一で選択することに意味がないことを一番よく知っている。ライブラリアンシップの原則は、図書館の扱うメディアの種類やサービスの物理的様態によつて揺らぐことはない。図書館は場所にとられない電子的なサービスと、図書館という場所にこだわるサービス、両者を融合したサービスを同時に進めているのである。

ただし図書館のデジタル化が進められる一方で、図書館という物理的場所が持つ力についての議論が高まっていることは確かである。それは図書館が単に資料を提供する場にとどまらず、メディアを通じて人間同士の関係性を構築していくことができる場所だからだろう。人々が自由に集まり議論する場の重要性にもかかわらず、それらが地域社会から失われつつあることが、人々に図書館という場の持つ意味について考えさせる要因となっている。公共空間がコミュニティから

衰退していく中で、公共図書館の物理的な存在感は高まっているのである。

そもそも図書館は様々なプログラムへの参加や、集会における交流、ボランティア活動などを通じてコミュニティの人的ネットワークの構築を促してきた。図書館が多目的機関として蓄積してきたサービスはこうした人間同士の交わりを支え、豊かな社会関係資本を生み出している。また図書館の場所としての力は、そこに集う人々の直接的な交わりに限定されない。自助機関としての図書館に集う人々は、図書館の持つ知識と情報コレクションを役立てたいという強い気持ちと共有している。そして司書は専門的な助言によって、利用者の期待にこたえる。こうした共通の意思を持った人々が図書館という空間を共有することは、図書館というメディアを通じてコミュニケーションだといえないだろうか。

## 十 おわりに

アメリカの公共図書館が今日まで存続してきたのは、それがコミュニティにとって必然的なものであったからである。図書館は単なる知的シンボルではなく精神的な拠り所であっ

た。公共図書館がコミュニティに溶け込み、揺るぎない位置づけを獲得している背景には、自己学習の場をコミュニティに確保することへの強い思いを抱く住民の存在がある。

地域の自助組織を自分たちの手で支えてきたアメリカコミュニティの歴史は、公共図書館にもそのままあてはめることができる。住民はごく初期の段階から図書館支援グループを組織し、図書館活動をサポートしてきた。現在アメリカのほとんどの公共図書館には民間の支援団体である図書館友の会がある。友の会はバザーや古書セールなどの収益金を図書館に寄付することで図書館を財政面で支えると同時に、さまざまなイベントを通じてコミュニティの図書館の存在意義を住民にアピールしている。

私たちは「コミュニティの図書館」について、その存在意義を深く考えたことはあったのだろうか。あるいはその存在を強く求めているのだろうか。公共図書館の存在を支持する住民の強い意思が示されなければ、サービスの効率性と量を誇る様々なメディアの勢いのなかで、公共図書館は存続の危機に直面するだろう。

（筑波大学図書館情報メディア研究科／図書館情報学）